

日本語の副詞サゾの意味分析

「共感」と「程度性」

杉 村 泰

1. はじめに

日本語の「サゾ」は従来推量を表す副詞の一つに数えられ、「他人の、あるいは未知の経験に対し共感・想像する気持ちを強める」¹⁾機能を持つとされてきた。確かに、次の(1)は他者である「彼」の心情について推量した表現、(2)は話し手にとって未知の経験である「今年の夏の気温」について推量した表現である。

- (1) 彼は今頃サゾ喜んでいることだろう。
- (2) この分だと今年の夏はサゾ暑くなるだろう。

しかし、同じ他者の心情や未知の経験でも、次のような場合には「サゾ」が使えず、「キット」を使わなければならない。(3)の「諦める」は「諦めの気持ち」と言えることから分かるように、人の心情を表す表現であることには間違いない。

- (3) 彼は今頃{*サゾ/キット}諦めていることだろう。
- (4) この分だと今年の夏は{*サゾ/キット}暑くならないだろう。

こうした点については、従来の記述からでは説明することができない。本稿はこうした「サゾ」の使用条件について、より精密な記述を試みたものである。

2. 先行研究

2.1 小林(1980)

小林(1980:21)は、「サゾ」を「述語のもつ「程度性」に対する推量判断」を表す副詞であると定義した。それは、「サゾ」は(5)のように述語成分に程度性のない文とは共起せず、(6)のように程度性のある述語としか共起しないためである。

- (5) a. *さぞこのタイプの女性はあきらめないのだろう。

- b . * さぞ全面撤退はないだろう。
- c . * さぞこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろう。

(6) V : 驚く、喜ぶ、困る、いやな気がする、手柄顔に話す、気を悪くする、勉強家のように見える

A 1 : おかしい、寒い、おもしろい、気のいい

A 2 : めいわく、安心

N : おかんむり

しかし、(5 a) の「諦めない」に程度性がないとしても、「諦める」なら「少し諦める」「完全に諦める」のように程度性があると考えられるし、(5 b) の「全面撤退はない」に程度性がないとしても、「撤退する」なら「少し撤退する」「かなり撤退する」のように程度性があると考えられる。それにもかかわらず、「諦める」や「撤退する」は「サゾ」と共起しない。こうした点は上の定義からでは説明できない。

- (7) a . * サゾこのタイプの女性はあきらめるだろう。
- b . * サゾ撤退するだろう。

小林 (1980) の程度性による説明は魅力的である。しかし、何をもって程度性の有無を言うのか、その基準を示す必要がある。

2 . 2 森田 (1989)

森田 (1989 : 488) は、「サゾ」を「話し手の現在認知できない条件に対して、その立場にある状態を推測的に想像し、推量判断を下すときに用いる」副詞であると定義し、次の条件のもとで使われることを指摘した。

- 他所・他者の現在の状況
 - a、離れた場所の状況や環境条件
「御地は南国ゆえさぞ暑いことございましょうね」
 - b、他者の置かれた環境条件
「彼も教頭職に就いて、さぞ多忙を極めていることだろう」
 - c、他所・他者の状態
「お嬢様もさぞお奇麗におなりあそばされたでしょうね」
 - d、他者の感情・感覚など

「日本に着いたばかりで、さぞお疲れでしょう」

〔二〕 他所・他者の過去の状況 (〔一〕 にも a ~ d が見られる)

「戦後しばらくはさぞ食糧難に悩まされたことだろう」

さらに「サゾ」は二人称にも三人称にも使えること、推測する契機があること、過去・現在、ないしは現在までの状態であること、その状態を話し手は現在未知未見であること、共感や同情の気持ちの伴う場合が多い、といった条件が前提となって使われることを指摘した。しかし、次の(8)(9)のように「サゾ」は一人称の事態や、未来の事態についても使われる。本稿ではこうした例についても、考えていきたいと思う。

(8) こんなにいい夜は、裸になって、ランニングでもしたらさぞ愉快だろうと思うなり。(林芙美子『放浪記』)

(9) 結婚式は生家ですることになっていた。田舎の結婚式だからさぞかし賑やかなことであろう。(新田次郎『孤高の人』)

2.3 森本(1994)

森本(1994)は、同じ蓋然性判断を表す「キット」と比較して、「サゾ」には次のような共起制限のあることを指摘した。(いずれも「キット」なら適文。)

(a) 高い蓋然性を示す構文(「だろう」構文、「ちがいない」構文)には現れるが、基本的平叙文には現れない。²⁾

(b) 「さぞ」と共起する文は肯定文でなければならない。

* 彼はさぞ悲しんでいないだろう。

(c) 「さぞ」と共起する文は非行為文(non-action)でなければならない。

* 彼はさぞ行くだろう。

また、次の(10)において「サゾ」を「ヒジョウニ」や「タイヘン」に置き換えても許容度は変わらない。森本(1994:70)はこれを根拠に、「サゾ」は「可能性の程度の高いことを示すとともに、文の内容の、質、量的に測定可能なある一部を強調するという複合的な特徴を持つ」として、その強調機能が語用論的に「共感」という意味と結びつくとした。

(10) a. * 彼はさぞ来る。

b. 彼はさぞ悲しんでいるだろう。

- c . この映画はさぞおもしろいだろう。
- d . このまちはさぞにぎやかになるだろう。(森本1994)

確かに「サゾ」には森本(1994)の指摘するような共起制限が見られる。しかし、「文の内容の、質、量的に測定可能なある一部を強調する」というのは要するに何を強調するのかよく分からないし、「強調機能が語用論的に共感と結びつく」というのもなぜそうなのか説明がない。むしろ後で論じるように、「サゾ」は第一に話し手の共感を表すと捉え、そこから強調機能を説明した方がよいと思われる。

2.4 小学館辞典編集部(1994)

小学館辞典編集部(1994:1011)は「サゾ」について、「推量を表わす文に用いられ、話し手が現在推測できない事柄を実感を伴って想像するとき用いる語」であると定義し、「さぞ」は、主に現在および過去の、話者の推測の及ばない事柄を推量するとき用いるのに対して、「さだめし」は、未来のこと、仮想した事柄についても用いられる」と説明した。³⁾しかし、先の(8)(9)にも示した通り、「サゾ」は未来のこと、仮想した事柄にも使われるため、この点についての修正が必要である。

2.5 飛田・浅田(1994)

飛田・浅田(1994:166)は「サゾ」について、「程度がはなはだしいことを推量する様子を表す。ややプラスイメージの語。推量の表現を伴う述語にかかる修飾語として用いられる。(中略)自分の関係する以外の相手の様子や物の状態などの程度のはなはだしさを推量するというニュアンスがあり、同情の暗示を伴う。自分自身の状態については用いられない」と説明した。確かに(11)を見るかぎり、同じ程度の甚だしさを表す「ドンナニ」が一人称の事態に使えるのに対し、「サゾ」は一人称の事態に使えないように見える。

- (11) a . * 第一志望に受かって私はさぞうれしかったことだろう。
 - b . 第一志望に受かって私はどんなにうれしかったことだろう。
- (飛田・浅田1994)

しかし、(12)のような場合には「サゾ」が一人称の事態にも使われる。従って、「サゾ」はどのような場合に一人称の事態に使え、どのような場合に一人称の事態に使えないのかを考える必要がある。

- (12) 私は自分の傍にこうじっとして坐っているものが、Kでなくて、御嬢さんだつたらさぞ愉快だろうと思う事が能くありました。(夏目漱石『こころ』)

2.6 分析の視点

先行研究では「サゾ」の意味特徴として、共感の意味が入る、程度性のある事態に用いられる、現在と過去の事態に用いられる、二人称や三人称の事態に用いられる、ということが記述されてきた。しかし、「サゾ」は一人称の事態や未来の事態にも使われるし、「程度性」という概念も曖昧に用いられてきた。本稿ではこうした点についてより精密な記述を行っていく。

3. 話し手の共感

3.1 推量判断

従来「サゾ」は「キット」「タブン」「オソラク」と同じ、推量を表すモダリティ副詞の一つに数えられてきた。⁴⁾ まずこの点について確かめておきたい。モダリティとは一つの文の中で「発話時点における話し手の心的態度」を表す成分のことを言い、それ自体は真偽の対象とはなりえないものである。以下のテストからも分かるように、「ヒジョウニ」が命題として真偽の対象となるのに対し、「サゾ」は真偽の対象とはならない。従って、「サゾ」はモダリティ副詞であると考えられる。

- (13) a. 入学試験は[{* サゾ / ヒジョウニ} 難しい]わけではない。
b. 入学試験は[{* サゾ / ヒジョウニ} 難しい]のですか。

次に CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』のうち日本人作家による67冊を対象に、「サゾ」と文末のモダリティ形式との共起について調査した。その結果、全144例中、「ダロウ」との共起が132例、「ニチガイナイ」との共起が4例、「ト思ウ」との共起が2例、その他が6例⁵⁾ 出現した。これら144例はいずれも推量の文脈で使われたものである。このことから、「サゾ」は推量判断を表すモダリティ副詞であることが分かる。

3.2 共感

森本(1994)は「サゾ」と「キット」を比較して、「サゾ」と共起する文は肯定文でかつ非行為文でなければならないとした。そこで先の CD-ROM の67冊を対象に、「サゾ」がどのような述語と共起するのかを調査したところ、表1のような結果が出た。

表1 サゾと共起する述語(全144例)

(CD-ROM版『新潮文庫の100冊』より)

動詞 (63例)	味がしみて香ばしく歯ごたえのある、安心する、怒る、イライラと焦る、いらいらする、怨む、大騒ぎする、驚く(6) おなかがすく、ガッカリする、可愛がる、感激する、気落ちする、気が利かずぼんやりしている、聞かせられる、気になる、気を悪くする、草臥れる、軽蔑する、喧嘩する、苦しむ、いろいろ苦しんだり疑ったりする、心が残る、心を乱す、困る(3) 籠む、混雑する、才色を兼ねた(女人だ) 心配する(2) 力を落とす(3) 疲れる、はなばなしい手柄を立てる、励む、びっくりする(2) 骨が折れる、(思い出を)身にまとう、見劣りしてみえる、虫の音誘う、悲愴の血涙に嘔ぶ、不信だらけな目つきをする、喜ぶ(11) 嗤われる
形容詞 (37例)	会いたい、暑い、あまっちょろくてまどろっこしい、いい(景色だ) 可い(心地) 佳い(者だ) 言いにくい、いまいまして憎たらしい、美しい(3) うまい、嬉しい、おかしい、覚えがめでたい、可愛い、きつい、苦しい、小気味がいい、心細い(3) 寒い(2) 淋しい、淋しく愁らい、高い、たまらない、つらい(3) 寢覚めが悪い、歯がゆい、ひもじい、やりきれない、わずらわしい、面白からぬ
形容動詞 名詞+ダ (18例)	安心だ、気がかりだ、滑稽だ、心残りだ(2) 窮屈だ、(茶道が)盛んだ、残念だ、心外だ、そうだ、難儀だ、不愉快だ、賑やかだ、迷惑だ、無念だ、愉快だ(2) 雪景色だ
修飾語+動詞 (25例)	いやにようすを売る、いろいろに噂する、いろいろと取り沙汰する、こっぴどい批判を浴びせる、たらふく食べる、たくさん食べる、うまく洗う、悪く言う、美しい音色を奏でる、たくさん苦勞する、うるさく言われてまごつく、いい気持ちになる、面白いことになる、美しくなる、真剣になる、勉強家のように見える、馬鹿げた意地に見える、馬鹿らしく見える、片腹痛く思う、可愛くおぼす、珍しくもいとおしくも思う、淋しさが増す、不安がある、苦心してマスターする、気持ちよく勉強できる
その他(1例)	顔だけ見ているとひき締った有礼好みの女である。裸になれば <u>さぞ</u> や、と妙なことで考えさせられる。(渡辺淳一『花埋み』)

表1に示されるように、「サゾ」は肯定かつ非行為の文と共起することが多い。しかし、中には「面白くない」「面白からぬ」のように否定表現と共起する例や、「手柄を立てる」「喧嘩する」のように行為動詞と共起する例もある。次にこうした例も含めた説明を試みる。

(14) 身分の低い女君たちとひとしなみに扱われて、さぞ面白からぬこともおありだろうと、拝察しているよ。(田辺聖子『新源氏物語』)

(15) 今度の戦いには、さぞかし、はなばなしい手がらを立てるだろうと、大将をはじめとして、みんな目を見はっていたのだ。(山本有三『路傍の石』)

- (16) いつでも極りの我まま様、さぞお友達とも喧嘩しませうな、(樋口一葉『たけくらべ』)

「サゾ」はまず、「喜ぶ」や「寒い」のように感情や感覚を表す表現と共起して、主体の感情や感覚を共感的に推量する場合に多く用いられる。(17)(18)は話し手が「母」や「姉様」の立場に立ち、その感情や感覚を共感的に推量した表現である。

- (17) 帰ると母がさぞよろこぶだろうと思った。(武者小路実篤『友情』)
 (18) 浜辺に往った姉様は、さぞ潮風が寒かろうと、ひとり涙をこぼしていた。(森鷗外『山椒大夫』)

また「サゾ」は、「たくさん苦勞する」「たくさん食べる」「うまく洗う」のように「程度・状態を表す修飾語+動詞」とも共起する。このとき「苦勞する」のように感情や感覚を表す動詞の場合は修飾語を省いても文が成立するが、「食べる」や「洗う」のように行為を表す動詞の場合は修飾語を省くと非文となる。

- (19) a. さぞさぞ沢山の御苦勞なさりましたろ(樋口一葉『大つごもり』)
 b. サゾサゾ御苦勞なさりましたろ。
 (20) a. さぞかしアメリカ人は沢山食べるだろう(野坂昭如『アメリカひじき』)
 b. *サゾカシアメリカ人は食べるだろう。
 (21) a. 松田さんならさぞうまく洗っておくれだろう(山本周五郎『さぶ』)
 b. *松田さんならサゾ洗っておくれだろう。

同様に「こっぴどい批判を浴びせる」「悪く言う」「美しい音色を奏でる」「苦心してマスターする」なども、修飾語を省くと「サゾ」と共起できなくなる。このことから「サゾ」は行為文とも共起するが、その場合、行為そのものではなくその修飾語と結び付いていることが分かる。そう考えると、先の(15)も「手がら」の前に「はなばなし」という修飾語があるため文が成立することが分かる。(16)も「サゾひどく喧嘩するだろう」の意味で解釈され、「サゾ」は省略された「ひどく」を修飾していると考えられる。

また、一般に形容詞の否定形は「サゾ」と共起できないが、「面白くない」は「サゾ」と共起することができる。

(22) 娯楽のほとんどない世界。若い者にはさぞ面白くもない世界だろう。

(<http://vivid-t.hp.infoseek.co.jp/novel/ryuki/tasogare.htm>)

(23) もちろん本人に悪意は無かったと思いますが、家康本人はさぞ面白く無かったであろうと思われます。(http://member.nifty.ne.jp/jhforum/aoi_rog10.htm)

(24) 味もそっけもない印刷の年賀状では、貰った方もさぞ面白くもなんともなかつう、とは思うのですけどね・・。(<http://www.hi-ho.ne.jp/mnoriko/bbs/list151.shtml>)

ここで思い出すのは、「*非常に嬉しくない」「*非常に寒くない」が非文となるのに対し、「面白くない」は「非常に面白くない」のように程度副詞の修飾を受けるということである。これは「面白くない」が「情けない」や「つまらない」のように一語の形容詞(肯定形)として機能しているためである。⁶⁾「サゾ」が「面白くない」と共起するものそのためであると考えられる。(この点については4.2節で論じる)

このように「サゾ」は常に感情や感覚、状態を表す表現と結びつき、話し手の主体に対する共感を表す。森本(1994)は「サゾ」のもつ強調機能がディスコースにおいて「共感という語用論的な含意」と結び付くとしているが、本稿では「サゾ」は第一に共感を表す副詞であると考えられる。この主体の身になって推量するという性質が、逆に「サゾ」の強調機能を生んでいるのである。(この点については4.3節で論じる)

3.3 二人称の心中の推量

森本(1994:69)は(25)の例文を挙げて、「(引用注:「キット」は)第三者の心中を推し量っているのならいいが、相手の心中を察して言う場合には、いささが無理が感じられるようだ。この、相手に対して共感を込めるという点に、「さぞ」と「きっと」の違いが感じられる」と指摘した。

(25) P: 息子は去年事故でなくなりました。

Q: そうですね。それはさぞおつらかったでしょう。

Q: きっとおつらかったでしょう。(森本1994)

確かに二人称の心中を推量する場合、「サゾ」は自然に使えるが、「キット」を使うと他人事のように聞こえる。これに対し、三人称の心中を推論する場合は、「サゾ」でも「キット」でも自然に使える

(26) a. あなたも{サゾ/?キット}辛いでしょう。

b. あの方も{サゾ/キット}辛いでしょう。

このことから「サゾ」の第一の機能は、主体の身になって共感的推量を表す点にあることが分かる。

3.4 事態の「時」

次に「サゾ」によって推量される事態が、過去、現在、未来のどの時点に属すのかについて見る。これに関し、森田（1989：489）は「過去・現在、ないしは現在までの状態であること」とし、小学館辞典編集部（1994：1011）も「主に現在および過去の、話者の推測の及ばない事柄を推量するときに用いる」としている。確かに、(27)は過去の事態、(28)は現在の事態である。

(27) さぞ、びっくりなさったでしょう。(田辺聖子『新源氏物語』)

(28) 吾一ちゃん、さぞ、おなかがすいたでしょう。(山本有三『路傍の石』)

しかし、(29)、(30)のように、「サゾ」は未来の事態、仮想した事態にも使われる。

(29) 妻は二人揃って御参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと云うのです。(夏目漱石『こころ』)

(30) この猿を毎日からかってやると、さぞおもしろいことになるだろう(司馬遼太郎『国盗り物語』)

従って、「サゾ」は過去、現在、未来に関係なく使えることが分かる。話し手の共感さえ及べば、「来年の夏はサゾ暑くなるだろう」でも「百年後の夏はサゾ暑くなるだろう」でも自然に使うことができるのである。

3.5 人称

「サゾ」と人称の関係については、森田（1989：490）が「他者や他所の既定の状態を思いやり共感する自発的感情」とし、飛田・浅田（1994：166）も「自分自身の状態については用いられない」としているように、従来話し手以外のものに対する推量であるとされてきた。確かに、(31)は二人称、(32)は三人称、(33)は他の場所に対するものである。

(31) 吾一ちゃん、さぞ、おなかがすいたでしょう。(山本有三『路傍の石』)

(32) 小さい、その可愛い秤を妻や子供がさぞ喜ぶ事だろうと彼は考えた。(志賀直

哉『小僧の神様』)

- (33) 「東京駅も、さぞホームが汽車で混雑していることでしょうね」(松本清張『点と線』)

しかし、次のように「サゾ」は一人称の事態にも使われる。(34)～(36)において「いい気持ち」「愉快だ」「うまい」と感じるのは話し手自身である。

- (34) 宝塚の清荒神に日本一の鉄斎の大蒐集があるという事は、兼ねてから聞いていた。片っぱしからみんな見たらさぞいい気持ちになるだろう。(小林秀雄『真贋』)
- (35) 私は自分の傍にこうじっとして坐っているものが、Kでなくて、御嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事が能くありました。(夏目漱石『こころ』)
- (36) 「いや、さぞかし焼いたらうまかろうと思うんだ」(曾野綾子『太郎物語』)

このように「サゾ」が一人称の事態に使われる場合、仮想した事態であることが多い。これは話し手自身のことであっても未経験の事態に対しては、他者の視点から推量できるためである。しかし、時には次のように、一人称の過去や現在の事態に対して使われることもある。この場合、話し手は自分を見る「観察者」の視点から、自分自身のことを推量していると考えられる。

- (37) a. 私は自分の全生活を背負って立命キャンパスにいたわけだが、みじめで、ちっぽけで、いい加減であることがわかった。さぞかし不信だらけな眼つきをしていたことだろう。(高野悦子『二十歳の原点』)
- b. (今の私は) さぞかし不信だらけな眼つきをしていることだろう。

また「サゾ」は、特にどの人称ということなく、一般的な状況を推量する場合にも使われる。この場合、話し手はその境遇にある何らかの人物に感情移入し、まるでその場にいるかのような気持ちで推量する。これに対し、(38)～(40)において、「サゾ」を「キット」に置き換えるとそうした臨場感がなくなる。

- (38) 北海道も、住めば都だそうだね。雪が屋根までつもるときいて、おどろいたよ。さぞ寒いことだろう。ぼくの方は変わりがない。(三浦綾子『塩狩峠』)
- (39) マンションの内部も、外観にふさわしく豪華な造りになっていた。内装や家具も、さぞ高かったろうと思わせる物ばかりである。(赤川次郎『女社長に乾杯!』)
- (40) 「あれほどの御道楽でござりますゆえ、御家中の御歴々のあいだではさぞ茶道が

お盛んでござりましょうな」(司馬遼太郎『国盗り物語』)

以上のように、「サゾ」は当該事態の経験者に感情移入して、その感情、感覚、境遇を共感的に推量する場合に使われる。普通二人称や三人称の事態に使われることが多いが、一人称の未実現の事態、仮定の事態に使われることもある。さらに他者の目から見た自分を描く場面では、一人称の過去や現在の事態についても使われる。また、一般的な状況を推量する場合、話し手はその境遇にある何らかの人物に感情移入していると考えられる。

4. 事態の程度性

4.1 「サゾ」と程度性

2節で見たように、従来「サゾ」は程度性のある事態にしか使えないとされてきた。しかし、程度性があっても必ずしも「サゾ」と共起できるわけではなく、程度性の中身について詳しい分析が必要である。例えば、(41)の「諦める」は「少し諦める」「完全に諦める」のように程度性を持つし、(42)の「暑くならない」も「あまり暑くならない」「全然暑くならない」のように程度性を持つが、「サゾ」との共起はできない。

(41) 彼は今頃{*サゾ/キット}諦めていることだろう。

(42) この分だと今年の夏は{*サゾ/キット}暑くならないだろう。

そこで本節では、「サゾ」がいかなる意味での「程度性」と関わるのかについて見ていくことにする。分析にあたってまず、「サゾ」が広い意味で程度性と関わることを確認する。次の(43)、(44)はいずれも推量文である。しかし、前者が「キット」としか共起しないのに対し、後者は「サゾ」とも共起する。

(43) a. そちらは{*サゾ/キット}雨でしょう。

b. 花子は疲れていたから今ごろ{*サゾ/キット}寝ているでしょう。

(44) a. そちらは{*サゾ/キット}ひどい雨でしょう。

b. 花子は疲れていたから今ごろ{*サゾ/キット}ぐっすり寝ているでしょう。

両者の違いは、前者が単に「雨だ」「寝ている」ということを推量しているのに対し、後者はその程度が「ひどい」「ぐっすりだ」ということを推量している点にある。このことから、「サゾ」は事態の程度を表す部分と結び付いていることが分かる。

4.2 「- 限界」

「サゾ」とは直接関係ないが、述語の程度性について論じた研究に佐野（1998）がある。佐野（1998）は、まず主体変化動詞句を進展性（変化が進展的・漸次的に進んでゆく性質）の有無によって「+進展的变化」動詞句と「-進展的变化」動詞句とに分け、次に前者を「+限界/進展的变化」動詞句と「-限界/進展的变化」動詞句とに分けた。⁷⁾ こうして、同じ程度副詞でも「だいぶ」「かなり」などは「進展的变化」動詞句すべてと共起するが、「非常に」「とても」などは「-限界/進展的变化」動詞句とのみ共起することを指摘した。

[- 進展的变化] 動詞句 :

死ぬ、割れる、(モノが)落ちる、生まれる、結婚する、(人が)座る、着る、(人が)消える

[+ 限界 / 進展的变化] 動詞句 :

暮れる、腐る、凍る、冷める、沸く、溶ける、治る、枯れる、(夜が)明ける、(魚が)焼ける

[- 限界 / 進展的变化] 動詞句 :

広まる、冷える、上がる、温まる、老ける、高まる、太る、痩せる、伸びる、縮む

ここで上の分類を「サゾ」と関連させて考えると、「サゾ」と共起できるのは「-限界/進展的变化」動詞句であることが分かる。形容詞の場合も、「サゾ」と共起する「美しい、寒い、元気だ」などは「-限界」の性質を持ち、「サゾ」と共起しない「ない、丸い⁸⁾、同じだ」などは「+限界」の性質を持つ。従来、「サゾ」は程度性のある事態に使われるとされてきたが、それは「-限界」の性質を持つものことであったのである。

このように考えると、「面白くない」が「サゾ」と共起できるのは、「非常に面白くない」が言えるように「-限界」の性質を持つためであり、「諦める」や「暑くならない」が「サゾ」と共起できないのは、「*非常に諦める」「*非常に[暑くならない]」が言えないように「-進展的」な性質を持つためであると説明できる。

4.3 標準以上に高い程度

「サゾ」は当該事態の程度が標準以上に高い場合に使われるという特徴を持つ。事実、(45a)のように雨がたくさん降る場合には「サゾ」が使えるが、(45b)のように少しの場合には「サゾ」が使えない。(45c)も、「キット」が雨の量と関係なく使えるのに

対し、「サゾ」は「たくさん降る」ことまで含んで推量していることが読み取れる。

- (45) a. 夏になれば{サゾ/キット}たくさん雨が降るでしょう。
 b. 夏になれば{*サゾ/キット}少し雨が降るでしょう。
 c. 夏になれば{サゾ/キット}雨が降るでしょう。

次の二つの会話文において、前者は単にその商品が安いのか高いのかを尋ねているのに対し、後者は値段を尋ねている。この場合も「キット」が両方の会話で使えるのに対し、「サゾ」は程度性のある後者の会話にしか使えない。後者の場合、「キット」が単に「高い」と言っているのみであるのに対し、「サゾ」は「標準以上に高い」ということまで言及している。

- (46) A: この商品、安いと思う、高いと思う?
 B: {*サゾ/キット}高いでしょうね。
 (47) A: この商品、いくらぐらいだと思う?
 B: {サゾ/キット}高いでしょうね。

実例では、下の(48)のように「サゾ」が「雪景色だ」に使われる例もある。「雪景色だ」は「*非常に雪景色だ」「*かなり雪景色だ」が言えないことから分かるように、程度性を持たず、通常「サゾ」との共起は不自然である。しかし、敢えて文学作品などに使われると、読み手は「さぞやたいした雪景色であろうな」「さぞやすばらしい雪景色であろうな」のように、共感を伴う修飾語を補って解釈することになる。(「キット」なら単に雪景色であることを推量するため自然に使える。)

- (48) 義昭は、洩を垂らしそうな顔で、寒そうにすわっている。
 「近江の戦陣も、{さぞや/キット}雪景色であろうな」
 と義昭は目で笑った。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

以上のように「サゾ」は事態の程度が標準以上に高い場合に使われる。「サゾ」は話し手が事態の主体の身になって共感的に推量する表現である。この主体の身になって推量するという性質が、「サゾ」の強調機能と結び付いていると考えられる。

5. まとめ

先行研究では「サゾ」について、共感の意味が入る、程度性のある事態に用いられる、現在と過去の事態に用いられる、二人称や三人称の事態に用いられる、ということが記述されてきた。これに対し、本稿では次のことを明らかにした。

「サゾ」

当該事態の経験者に感情移入して、その感情、感覚、境遇を共感的に推量する

- ・二人称や三人称の事態に使われることが多い(過去、現在、未来)
- ・一人称の未実現の事態、仮定の事態にも使われる
- ・他者の視点から自分を描く場合は、一人称の過去や現在の事態にも使われる
- ・一般的な状況を推量する場合、話し手はその境遇にある何らかの人物に感情移入している

過去、現在、未来のいずれの事態にも用いられる

共起する述語は「-限界」の性質を持つ

- ・当該事態の程度が標準以上に高い場合に使われる
- ・行為文に使われる場合は、行為そのものではなくその行為の程度・状態を規定する修飾部分に係っている

主体の身になって推量するという性質が、「サゾ」の強調機能と結び付いている

付記：本稿は平成14 - 15年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B))「日本語電子化コーパスの利用による日本語文法教育の研究」(課題番号14780160)による研究成果の一部である。

注

1) 旺文社『旺文社国語辞典』第八版(1992)の記述による。

さ・ぞ【嘸】(副)さだめし。さぞかし。さぞや。きっと。「北国は-寒かったことでしょう」

用法 あとに推量の語を伴い、他人の、あるいは未知の経験に対し共感・想像する気持ちを強める。**語源** 副詞「さ」に強めの係助詞「ぞ」のついた語。

2) 先の小林(1980)は、「サゾ」は「ダロウ」とのみ呼応し、「ヨウダ」、「ラシイ」、「断定」、「ニチガイナイ」とは呼応しないとしている。

3) 森田(1989:489)も、「さぞ」が現在と過去の状況についての推測判断であったのに対し、「さだめし」は現在・過去のほか、未来推量にも使える点、用法は広い」としている。

- 4) ただし、「キット」は推量文の他、意志文、命令文、勧誘文にも使われる。そのため本稿では、「キット」は「事態の実現に対する話し手の強い信念を表す」と考える。
- (i) a. 明日は{キット/タブン/オソラク}学校に行くだろう。(推量文)
 b. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}学校に行きます。(意志文)
 c. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}学校に行け。(命令文)
 d. 明日は{キット/*タブン/*オソラク}一緒に学校に行こう。(勧誘文)
- 5) その他の6例は次の通りである。
- (i) とにかく家の手助けしたのだから、さぞやたらふく食べられるはず。(野坂昭如『ラ・クンバルシート』)
- (ii) 「美しいかたなのね? さぞ.....」(田辺聖子『新源氏物語』)
- (iii) さぞかし貴郎のお怒り遊した事と気が気では無かつたなれど、(樋口一葉『われから』)
- (iv) さぞかし味がしみて香ばしく歯ごたえのあるそのお焦げ、未亡人のむさぼる姿思うと腹が立つよりつばきがにじむ。(野坂昭如『火垂るの墓』)
- (v) 玉鬘の姫君とやらが、さぞ可愛がって下さいますよ.....(田辺聖子『新源氏物語』)
- (vi) 顔だけ見ているとひき締った有礼好みの女である。裸になればさぞや、と妙なことまで考えさせられる。(渡辺淳一『花埋み』)
- 6) 現代語では「嬉しくない」「寒くない」は形容詞の否定形、「情けない」「つまらない」は一語の形容詞(肯定形)「面白くない」はその両者の性質を持っていると考えられる。
- 7) 佐野(1998: 8)は、「進展性に限界を持たない動詞句とは、いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持つものであり、進展性に限界を持つ動詞句とは、変化の結果成立した結果状態が更に変化する可能性を持たないものである」と説明している。
- 8) ただし、「丸みがある」の意味でなら「彼女の顔はサゾ丸いだらう」のように言える。

参考文献

- 小林幸江(1980)「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』7, pp. 3-22, 東京外国語大学日本語学校
- 佐野由紀子(1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3, pp. 7-22, 国立国語研究所
- 小学館辞典編集部(1994)『使い方の分かる 類語例解辞典』, 小学館
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版

